

日本におけるグリーン倫理学研究史

行 安 茂

1. グリーン研究の先駆者

グリーンの名前が日本において何時頃から誰によって知らされたのであろうか。現在のところわれわれが知っていることは中島力造（1858～1918）によってグリーン倫理学説が熱心に紹介されたことである。かれはグリーンよりも12才年少であるが、ともに第十九世紀の後半に活躍した哲学者である。中島力造は米国のエール大学において学び、そこにおいて「ドクトル・オブ・フィロソフキー」の学位を受領し、後英国に留学した。当時、英国においてはグリーン、シジウィック、スペンサーの三人の学説が支配的であったが、中島力造はグリーン自我実現説によって強く影響された。「中島氏の所謂人格実現説は畢竟グリーン自我実現説から脱化して来たもので、グリーンに負うところが最も多大であったというべきである。」「中島氏の倫理学上の主張は人格実現にあったから、無論理想主義で決して功利主義の考えではなかった。それから自由意志説については哲学的のものと科学的のものとを区別して、科学的の自由意志をとり、自己決定という事実に基いて意志の自由を主張して居ったのである。」¹⁾ 中島力造は明治25年8月8日付で東京帝国大学文科大学教授に任じられ、同27年9月の新学期から哲学科においてグリーン「倫理学序説」を講読したといわれている。²⁾

かれによって育てられた学者は吉田静致、藤井健治郎、西晋一郎、深作安文等である。³⁾ これらの人々の著作を見るとグリーンによって影響されたと思われる足跡が見える。とくに西晋一郎は明治35年に「グリーン氏倫理学」を翻訳し、出版した。本訳書は明治35年4月2日に初版が発行された。全体は814頁に及ぶぼう大な訳書である。本書の序言において西晋一郎はつぎのようにいっている。「本書は故の英国オクスフォード大学道徳哲学教授トマス・ヒル・グリーン氏の倫理学緒論(Thomas Hill Green, Prolegomena to Ethics)を翻訳したるものなり、原書は疑も無く近來の倫理学書中の一傑作なり、その難解なるものあるは主としてその内容に依る、蓋しこの種の書読者に容易ならぬ思惟の努力を要求するは免れず、読者十分句読に注意し且つ巻首なる内容綱領を一々参考し、一節または二三節を通じて反覆思考して進むべきなり、また原書の出版者も言える如く哲学上の議論に慣れざる読者は便利上先ず第三及び第四編を読み著者の倫理学上の意見の大部を知るを得、然れども著者はその説の科学的根拠を第一及び第二編に於て力を極めて立論せる故に是を十分領得せざれば、未だ全説を了解したりというを得ず」。原著書は470頁に及ぶ大著であって後30頁位で完全な著書となる予定であったが、グリーン早死はその完成を不可能にした。原書には最後に索引は設けられていないが、西晋一郎の「グリーン氏倫理学」の最後には「訳語索引」が付せられている。それを見ると現在使用されている訳語とは少し違った訳語が用いられている。たとえば、

偏向 (inclination), 後果 (consequence), 定道論 (determinism), 歷程 (process), 無上大法 (Categorical Imperative), 天啓現示 (revelation), 自己奉供 (self-devotion), 否徳 (vice), 聖権 (authority), 想見する (to conceive), 奉役 (service), 認承する (to recognize), 等があげられる。

西晋一郎の「グリーン氏倫理学」は丁酉倫理会講演集第九において以下のように紹介されている。本書が当時いかに信用するに足る訳書であったかを知ることができる。「グリーン氏の倫理学はその高遠な知識論から出て居るので、中々解し難い処へもって来て、その著“Prolegomena to Ethics”は著者が生前の講義録から後人が集め来って編纂したものだから一層難解の書として取扱われて居た。されば従来斯学の専門家たちが幾度か翻訳しようと取掛った事もあったそうだが、とうとうこの訳者によって出されるまでには一冊も出なかった。一体翻訳と言うものは厳密に言うとは難しいもので、もしこれを完全にやろうとなると到底一通りや二通りの苦心では出来ないことは言うまでもない。ことに哲学に關した著書の翻訳は頭腦の明晰な訳者がその全身を原著の内に入れてやらなければ、とても忠実な誤のないものを産み出すことは出来ない。処が自分の思想を没却して悉く原著の内に入ろうとすることは容易の事でないから、そこで従来行なわれた翻訳書と言うものは、訳著にも分らない、況んや読者には一層わからないものが多いのだ。従って翻訳書の信用と言うものが余程疑わしいものであった。然るに今度西氏の出した本書は未だその全体に涉って読誦したのでないから、その悉くを保証するわけには行かぬが、今迄に読み来った半分ほどの処で見ると、少し軽卒の言い方ではあるかも知れないが、術語の訳し方から語句の頭し方に至るまで充分信を置くべき程の苦心を首肯し得る点に於て、進んで全編を正確な翻訳書として認めることが出来ようと思われる。兎にかく吾人この近代の傑作として倫理学を学ばんとするものの必読すべきオーソリティの有る大著述が、邦語に移された功績は、これを西氏の苦心に謝せなければならぬ」。⁴⁾

本書が出版されるまでは日本においてグリーン氏の「倫理学序説」は翻訳されなかった。それだけに本書は日本の学界に非常な貢献をなしたということができよう。西晋一郎の「グリーン氏倫理学」が出版される一年前、すなわち明治 34 年に「倫理学書解説」が育成会から発行された。本書の第十巻は西晋一郎の筆による「グリーン氏倫理学序論」である。これは訳書ではなくて解説書である。この解説書を見ると、

1. グリーン氏の伝, 2. グリーン氏倫理学序論の概要, 3. 批評

となっている。内容はこれら三項目にわたって極めて原書に忠実にそって要点を適切にのべた論文であって、83頁にわたるものである。本書はグリーン倫理学の入門書であるといつてよい。われわれにとって興味のある点は西晋一郎がグリーンをどのように見ているかということである。上記「批評」の内容を読んでみると、西晋一郎はグリーンをカントの垂流とみている。グリーンがカントから影響された点は以下の諸点であるとされる。

第一はカントの定言的命法である。「氏(グリーン)が社会と個人との關係を論ずるは氏以後人々の如く動物的有機体との比論によらずして実に理性を根拠となしたり、カント氏の『汝の人格にても他人の人格にても人格はこれを目的それ自身となせよ、単に方便となす勿れ』との定言

を出発点として社会の成立を論じたるは明らかなり、吾人はここに簡単にカント氏のグリーンに影響せる所を見んと欲す⁵⁾。

第二はカントの実践理性である。グリーンの自我実現は実践理性の実現、すなわち善意志の実現であるとされる。「グリーン氏の所謂永久的の意識は世界の本体にして、世界はこの意識の現象なり、この意識は知識の主体としては思弁的理性と見られるべく、欲望の主体としては実践理性と見るを得、これ氏自ら断言せる所なり、しかれども人の真個の目的は人の才量を充分に実現するにあり、その完全なる実現の状態は今日詳細に知るを得べからざるも、必ずや道徳的能力の実現、即ち善意に到達するにありということは断言し得べし、と極論せるを見れば、氏の所謂永久的の意識は明らかに道徳的のものにして、その実践的の性質は思弁的の性質よりも首座にあるべし、それ故氏は終局の目的を善意即ち意志の純化にありとしたりなり、即ち氏の永久意識は寧ろカント氏の純粹意志若しくはフィヒテ氏の自我の方向にして、ヘーゲル氏の『ロゴス』の方にあらず⁶⁾。

第三は自律である。グリーン倫理学にはカントから影響を受けていると思われる面として自由の思想がある。西晋一郎はこの点を以下のように指摘している。「グリーン氏曰く、人の社会にあるや絶えず理想の実現に汲々として社会生活の改良を自己の上に責任として課すと、また曰く、国家、社会、教会の聖権はその實際を悟れば外部の聖権にあらずして吾人自身の命令なり、義務とは自己の内部の命令なり、人が聖権を認承する以上はその聖権は服従を要求すとの概念を包含す、しかしてこれは自己が自己に課する服従なるを意味す、賞罰の如何に拘わらず理性が善なりと示したる所に服従するを意味す、それ故に外部の命令は聖権の真意を欠ぐものなりと、これ実にカント氏が最も主張する自主に外ならず⁷⁾。以上の考察からわかるようにグリーンはカントの定言的命法、実践理性、自律から主として影響されている。この点においてか、西晋一郎はグリーンをカント流と見なしている。しかしグリーンはヘーゲルからも幾分影響されている。即ち「氏謂らく、道徳の標準は人の内部の衝動即ち理想として現わる、この理想の完成の終局状態は今日迄に到達せられたる国家社会の諸々の制度、習慣、法律等によりてその方向を告ぐるものなり、何となればこれらの制度、習慣等は永久的の意識の自己再現の結果なればなりと、この思想は即ちヘーゲル氏より来りしなり⁸⁾。

以上は西晋一郎が見たグリーン観である。グリーン倫理学はカント、ヘーゲルの観点からのみその垂流としてみられるのが全てであろうか。グリーンは他の観点からも見られないのであろうか。西晋一郎はカントから学びとるものが大きいと考えるあまりグリーンをカントの見地から見ている偏向がありはしないであろうか。これらの疑問は残るであろうけれども、西晋一郎のグリーンについての学問的業績は高く評価されてよいであろう。

2. 明治時代におけるグリーンの影響

明治時代の思想界、哲学界においてグリーンが及ぼした影響は少なくないように見える。われわれはこれを西田幾多郎に見出すことができる。西田幾多郎の思想は西洋哲学と東洋思想とをともに学びとって形成されたが、その過程においてグリーン「倫理学序説」が影響を与えた、⁹⁾

西田幾多郎は明治 27 年 7 月東京帝国大学哲学科選科を卒業し、同年 10 月頃に初めてグリーンの「倫理学序説」を読んだ。かれはこれを要約して「グリーン倫理学」と題して「教育時論」に掲載した。¹⁰⁾ 明治 44 年 1 月に出版された「善の研究」第三編「善」を読んでもとグリーンの自我実現説が西田幾多郎によって好意をもって受けいれられている。本書の第三編を読んでもと、そこには直覚説、権力説、主知的倫理学説、快樂説、活動説等西洋の主な倫理学説を重点的に述べその問題点を明らかにし、且つ批評している。その最後は「完全なる善行」という章で終わっている。第三編をよくよんでもと、そこには西田幾多郎の独自の考え方、とくに禅の修行の結果開眼されたと思われる見識がはっきりとにじみ出ている。たとえば本編第 11 章「善行為の動機」の中で「真の善行というのは客観を主観に従えるのでもなく、また主観が客観に従うのでもない。主客相没し物我相忘れ天地唯一の实在の活動あるのみなるに至って甫めて善行の極地に達するのである。物が我を動かしたのでもよし、我が物を動かしたのでもよい。雪舟が自然を描いたものでもよし、自然が雪舟を通して自己を描いたものでもよい」¹¹⁾といわれている。この考え方は主観と客観とが融和し、自己と他者との不二の世界があることを示すものといえる。こうした禅的な見方にグリーンの自我実現説がどの程度貢献したかは問題であろうし、貢献に限界のあることも認められるように思うが、「善の研究」にはグリーンの自我実現説が影響しているとみられる一文がある。

「さて善とは理想の実現、この要求といい理想という者は何から起ってくるので、善とは如何なる性質の者であるか。意志は意識の最深なる統一作用であって即ち自己その者の活動であるから、意志の原因となる本来の要求或は理想は要するに自己その者の性質より起るのである。即ち自己の力であるといってもよいのである。我々の意識は思惟、想像に於ても意志に於てもまた所謂知覚、感情、衝動に於ても皆その根底には内面的統一なる者が働いているので、意識現象は凡てこの一なる者の発展完成である。しかしてこの全体を統一する最深なる統一力が我々の所謂自己であって、意志は最も能くこの力を発表したものである。かく考えて見れば意志の発展完成は直ちに自己の発展完成となるので、善とは自己の発展完成 **self-realization** であるといえることができる」¹²⁾。これを見ると西田幾多郎は意志を重視し、その活動を強調していることがわかる。ただ意志は統一的意志であって、感情、衝動が内面的に統一されなければならないのである。かかる統一に向って発展する意志が真の自己完成であるとみられているのである。この点においてグリーンの自我実現説は西田幾多郎の思想に似ている。事実、グリーンは自我の統一ということ強調し、この見地から欲求、知性、意志の三者関係を明らかにしている。西田幾多郎はグリーン自我実現説をさらに徹底し、個性の発揮に真の自己実現があることを強調する。「個人に於て絶対の満足を与える者は自己の個人性の実現である。即ち他人に模倣のできない自家の特色を実行の上に発揮するのである。個人性の発揮ということはその人の天賦境遇の如何に関せず誰にでもできることである。いかなる人間でも皆その顔の異なるように、他人の模倣のできない一あって二なき特色をもっているのである。しかしてこの実現は各人に無上の満足を与え、また宇宙進化の上に欠くべからざる一員とならしむるのである。従来世人はあまり個人的善ということ

に重きを置いておらぬ。併し余は個人の善ということは最も大切なるもので、凡て他の善の基礎となるであろうと思う。真に偉人とはその事業の偉大なるが為に偉大なるのではなく、強大な個人性を発揮した為である。高い処に登って呼べばその声は遠い処に達するであろうが、そは声が大いのではない、立つ処が高いからである。余は自己の本分を忘れ徒らに他の為に奔走した人よりも、能く自分の本色を發揮した人が偉大であると思う¹³⁾。

グリーンの自我実現においては西田幾多郎がいうような「自分の特色」とか「個人性」とかのような各人に固有な特性を發揮する面は少し弱いように見える。しかしグリーンは各人の「性格」を行為を決定する際の重要な要素とみているから、これが西田幾多郎のいう「個人性」に通ずるようにも考えられる。いずれにせよ両者の倫理説は個性の發揮、独自の価値を發揮することを強調していることは否定できない。西田幾多郎のいう個人的善は私利私欲にもとづいたものではない。また、それは社会的善と矛盾するものでもない。一見したところ個人的善と社会的善とは矛盾するように見えるけれども動機と事実との関係を精査すれば、両者は調和するという。この点を明確にするためには個人的意識と社会的意識との表裏一体の関係が理解される必要がある。両意識が一つのものとして自覚されるのは人格において可能であるとの見地から西田幾多郎は「人格の実現」を主張し、ここに個人性の実現と人類愛との一致の可能性を見出している。

「我々が内に自己を鍛錬して自己の真体に達すると共に、外自ら人類一味の愛を生じて最上の善目的に合うようになる。これを完全なる真の善行というのである。かくの如き完全なる善行は一方より見れば極めて難事のようなのであるが、また一方より見れば誰にもできなければならぬことである。道德の事は自己の外にある者を求むるのではない、唯自己にある者を見出すのである。世人は往々善の本質とその外殻とを混同するから、何か世界的人類的事業でもしなければ最大の善でないように思っている。併し事業の種類はその人の能力と境遇とに由って定まるもので、誰にも同一の事業はできない。併し我々はいかに事業が異なっても、同一の精神を以て働くことはできる。いかに小さい事業にしても、常に人類一味の愛情より働いている人は偉大なる人類的人格を実現しつつある人といわねばならぬ¹⁴⁾。

西田幾多郎が明治 27 年 10 月にグリーン「倫理学序説」を読んでから「善の研究」が明治 44 年に出版されるまで 17 年の年月が経過しているが、この間日本における西洋倫理学説はどのように輸入されたであろうか。またこの間日本の学者は西洋倫理学のどの方面に関心をもったであろうか。この点について全体にわたって考察することはここではできないので、グリーンを中心にして考えてみた場合西洋倫理学説がどの程度紹介され、研究されたかを概観してみよう。明治 30 年山本良吉著「倫理学史」が出版された。本書は H. Sidgwick, *History of Ethics* から摘訳されたものである¹⁵⁾。明治 31 年には中島力造著「倫理学説十回講義」が出版された。本書は古代ギリシャから第 19 世紀までの倫理学説を英独仏のそれを含めて解説したものである。明治 33 年に綱島梁川は「スチーヴン倫理学」を出版した。また明治 35 年、綱島梁川は「西洋倫理学史」を出版した。これは H. Sidgwick, *Outline of the History of Ethics* を主として参考にして書かれたものである。明治 38 年には育成会から「倫理学書解説」が発行された。本書はつぎの 15

人の倫理学説を紹介したものである。

アリストテレス氏倫理学……………	桑木 巖翼氏
カント氏倫理学……………	蟹江 義丸氏
フィヒテ氏倫理学……………	深作 安文氏
グリーン氏倫理学……………	西 晋一郎氏
マッケンジー氏倫理学……………	雀部 顕宜氏
デューク氏倫理学……………	中島 徳蔵氏
ミュイアヘッド氏倫理学……………	桑木 巖翼氏
スチーヴン氏倫理学……………	綱島 栄一郎氏
ヴント氏倫理学……………	蟹江 義丸氏
パウルゼン氏倫理学……………	蟹江 義丸氏
パウルゼン氏実践倫理……………	深作 安文氏
パウルゼン氏社会倫理……………	野田 義夫氏
ミュンステルベルヒ氏道德の起源……………	中島 泰造氏
バウン氏倫理学原理……………	藤井健次郎氏
ニーチェ氏倫理説一斑……………	桑木 巖翼氏

本書は 1643 頁に及ぶ大解説書であって「序説」として吉田静致による「倫理学の現在及び将来」と題する論文を冠している。本書は明治 33 年 4 月に最初発行された。このときは 12 人の学説が解説されたが、本書改版に当って 3 人の学説が付加された¹⁶⁾。以上を概観してみると、明治 30 年代は英国の倫理学が日本に多く輸入され、紹介されていることがわかる。とくにグリーンを中心とした理想主義の系統の倫理学とシジウィックの「倫理学史」とが注目されていたとあってよいようである。明治 35 年から同年 37 年にかけて「哲学雑誌」に発表された論文題目をみるとグリーンの自我実現説から影響されたと思われるテーマが見える。

小西重直「倫理上の自我の観念」(明治 35 年)

藤井健次郎「自我実現の哲学的基礎」(明治 37 年)

紀平正美「自我について」(明治 36 年)

大島正徳「人格の根本的研究」(明治 37 年)

吉田静致「社会我」(明治 37 年)¹⁷⁾

以上われわれはグリーンが日本の倫理学界に与えた影響を考察したが、この外にグリーンが及ぼした影響もあることであろう¹⁸⁾。グリーンが明治の日本に何故受容されたかについては本稿の第五節において評論するのでこの問題はここではとりあげないでおく。

3. 大正時代におけるグリーン研究の状況

大正時代にはいつからグリーンを直接研究した足跡は見られないが、グリーンを部分的に扱い、かれの倫理学説を批判したり、解釈したりする著書が見うけられるので、以下これらの著書を列挙し、グリーンがどのようにみられたかを考察することにしたい。

1) 藤井健次郎・藤本慶祐共訳「簡明倫理学史」, 早稲田大学出版部, 大正 3 年。

本書はレギナルド・ロージャースの“A Short History of Ethics”の全訳である。著者は英国の倫理学者であってその立場はグリーンの自我実現説に近い。このことは本訳書の結語の章においてつぎのように原著者がのべていることによってわかる。「グリーンはその博愛的性向の為に人類の興味に対する『献身』を以て一切諸徳中、最高の徳なりとするに至れり。唯々献身を以て『自我実現』と同一視し、これを『自我拒否』と同一視せざるものとするのみにて、この説は十分なる真理を顕わすものとなるなり。『実現す』べき自我は根本的に見る時は、社会我なりと雖も同時に私的興味の主体なり、これ重要にして快樂主義はその欠点あるに拘らず、永くこの真理を生存せしむるなり」¹⁹⁾。訳者藤井健次郎もグリーンやリップス等の理想主義の倫理学に強い関心をもった学者であったところからしてみると、同じ傾向の著者に接近したのは自然である。本訳書の冒頭には原著者ロージャースから藤井健次郎あての書簡が英文・訳文ともにのせられている。本書は英国を中心にしてまとめた西洋倫理学史である。

2) 紀平正美著「自我論」, 大同館書店, 大正5年.

本書は前編と後編とから成っており、後編の第六章「自己実現の意義」においてグリーンの自我実現説が批判的に解釈されている。「従来の自己実現説の誤れる所のもは、我等人格の実現すべきものを抽象的に特定のものとして始めから定めてかかる事であった。しかしてその結果功利的性質を免れることが出来ないか、或は無内容の形式説になり了ったのである。されば前にも言えるが如く実現すべきものは始めに存在するものでもなければ、終に完成せられるべきものでもない、その始めをして始めたらしめ、終をして終たらしめ、それを一貫せしむる力の実現に外ならないのである。『大学』に『事に本来あり物に終始あり、先後する所を知れば道に近し』とあるは即ちこの意義と解すべきである」²⁰⁾。第5節においてのべるようにグリーンの自我実現説は儒教と調和しやすいものとして日本に受容された。紀平正美も儒教の神精を最もよくあらわしているといわれる「大学」に立脚してグリーンの自我実現説を解釈している。

グリーン倫理学説は倫理学界のみならず教育界にも関心をもって迎えられた。たとえば大正7年10月発行された「丁酉倫理会、倫理講演集」(第百九十四輯)の「応問」の欄には一般読者からつぎの四つの問題が質問されている。

1. グリーンの道徳的理想の実践的価値に関する意見
2. 因果律と意志との関係
3. 四書の邦語訳解
4. 倫理と道徳との厳密なる区別

第一の質問に対しては以下のように答えられている。この答をよく読んでみると大正年代におけるグリーン受容は自己修養の見地にもとづいてなされていることがわかる。「今善の理想の論が吾人の実際に何をなさざる可からざるかを決定するに裨益ありやと考うるに当り、まず注意す可きことは、『何をなさねばならぬか』という質問に二個の意味があって、第一には結果に就て考う可きか、第二は精神及び品性の状態即ち動機に就て考う可きかと言うことである。然るに後の場合が前者より大である、グリーンの本来の主張に於て苟も行為にして完全に善たるために

は動機が必ず善でなければならぬこととなる。その善なる行為は当然にその行為者の品性を現わすものである。然しながら吾人は自己の動機につきては判断を下し得るとするも他人の動機は容易に正確に知り得るものではない。即ち他人の動機はこれをその結果につきて判断推測するを要することとなる。然らば所謂結果論功利主義であるかと言えはそうでない。有徳の品性は最高善の手段と言うよりも、原理に於て最高善と同一であるとグリーンは考えている。

また人は相対的である。最良と思う動機が必ずしも最良の結果を生ずるものでなく、悪なる動機は必然に悪なる結果を来すとは限らぬのが人生の常である。ここに於て人は常に反省して良心コンシエンシアスなることを要する。即ち、動機につきてその結果につきて、果して善なりや、両者の間に希望したる一致ありやと反省せねばならぬ。それが道徳的修養である。これによりて個人の品性も発達し社会も改善せらるるであろう。かくて自己の理想と社会の現状とを接近せしむることが社会改良者の目的である。

かくの如く自己の動機の内省と言うことは極めて大切なることで修養せんとする士は一日も怠る可からざることである。即ち自己一人につきて、家族の内に於て、国家、社会の内に於て果して何をなさざる可からざるか、自己のなせる処は果してそのなす可きものなりしやと問い来るとは極めて大切にして、自己の責任感を鋭敏に働かせねばならぬ。かくて当に理想を立てて如何にせばこれを実現す可きかを考ふることが必要である。理想と実行との接近一致が即ち道徳である。

以上はグリーンの理想と実践との関係につきての意見の一節（倫理学序論第四編第一章）であるが、吾人は道徳の実践問題として最も妥当健全なる見解であると信ずる²¹⁾。

大正時代から昭和時代においてはグリーンは文検修身科志望者の間において必ず知られていなければならない人であった。かれの自我実現説は独学で文検に合格しようとして本務のかたわら勉強する人にとっては非常に感銘を受けたことであろう。

3) 渡辺竜聖著「批評的倫理学」, 南光社, 大正 10 年.

本書は明治 33 年に発行されたが、大正 10 年に改訂し出版された。著者はグリーンの自我実現説によって影響され、これを修正発展させて自己の倫理学の中心としている。とくに著者はグリーンCommon goodの思想から影響され、これを「治善」と訳している。本書第十章「自己実現説は治善説」において「自己実現説はまた完全説の名あり。蓋し、自己を実現するは、自己を完全にするの謂なればなり。然るに、人間終局の目的は自己の完全というに於て、これが即ち善悪の標準なりと言わばこの説は甚だ利己主義に似たれども、その実然らず。何となれば、自己の実現は自己の善たると同時に社会共通の善なり、即ち治善なり²²⁾」とのべられている。著者はグリーン治善を目的として自己を実現するのが真の自己実現であるとの結論に達した。かかる結論は西洋倫理学説を比較吟味して得られたものであって、本書の結論の章である第十一章「道徳的生活」にはグリーン自我実現説が影響しているとみられる一文がある。「前所論の結果として、道徳の標準は神法、国法にあらず、自然法にあらず、また道徳的感覚にあらず、同情心にあらず、良心にあらず、幸福にあらず、純理にあらずして、帰する所自己の実現なり。自己の実現とは現在の自己を進歩し、発達せしめて、弥々理想的自己に近づかしむるを言う²³⁾」。

著者は自己実現の場を自己，家族，国家，社会，宇宙（天然界）に求めている。この考え方はグリーンやブラッドリーの思想に似ている。

4) 大島正徳著「近世英国哲学史」，三共出版社，大正 15 年。

本書はグリーンの哲学について六節に分け 51 頁にわたって評論的に考察している。本書はグリーン「倫理学序説」の第一編「知識の形而上学」を主として考察している。その倫理学についてはごく少ししか言及していない。著者によればグリーン「の立場はカントのそれとはやや異なっているとされる。「カントに於ては思弁的理性で見た世界から実践的理性による世界へ移るには巨大な溝を越えなければならなかった。……然るにグリーンに於ては自然に関する認識論に於て示された精神的原理は同時にそのまま道德論に応用され，理想主義の成り立つべき根拠として直ちに承認されたのである」²⁴⁾。ではこの原理は道德論においていかに応用されたであろうか。グリーン「の精神的原理は哲学においては感覚にはたらきかけ，知識を成立させるが倫理学においては衝動や欲望にはたらきかける。すなわち「衝動や欲望の上に永久意識が働き，それらを永久意識の自己実現の目的の下に統一して承認する所に，道德的行為が成り立つというのである。即ち，知識の哲学に於て感じとか感覚とかいえるものに代ゆるに，欲求とか衝動とか欲望とかをもち来って，それらを支配し統一し秩序づけるものとして，永久精神の自己実現を説けば，即ち彼れの倫理哲学の根本義は成り立つのである」²⁵⁾。

以上は大正時代においてグリーンをかなり批判的にとり扱っていると思われる著書を列挙し，その要点をのべたわけである。以上の外にグリーンに関説している著書として無視できないものもある。たとえば，

1) 中島力造著「最近倫理学説の研究」，岩波書店，大正 8 年。

2) 三浦藤作著「西洋倫理学史」，中興館書店，大正 11 年。

3) 村田豊秋著「近代哲学大系」，成光館，大正 14 年。

があげられる。大正時代を通していえることはグリーン「の倫理学について批判的であったということである。しかしこの批判もグリーン「について深く研究した結果によるものではないようにみえる。

4. 昭和時代におけるグリーン研究

昭和にはいってからグリーンを研究した人は河合栄治郎，友枝高彦，近藤兵庫，北岡勲である。河合栄治郎はグリーン「の思想によって非常に影響を受け，自己の思想の中心を「自我の成長」においた。これはグリーン「の自我実現説を学びとったものであろう。さて河合栄治郎は多くの著書を書いているが，それらの中でグリーンを直接に研究したものはつぎの二著書である。

1) 河合栄治郎著「トーマス・ヒル・グリーン「の思想体系」昭和 5 年。

2) 河合栄治郎著「社会思想家評伝」昭和 11 年。

いずれも日本評論社から出版された。前者は昭和 5 年に上下二巻に分れて第一版が発行された。第一版の序文をみると本書がどのような性格のものであるかがはばうかがえる。「本書はグリーン「の思想体系を紹介することを主要な目的とするものである。然し他人の思想を理解するこ

とも結局研究者自身の水準以上に出でえないことを、グリーンを研究して今更に私は感ぜざるをえなかった。読むことが回数を重ねるに従って、曾て気付かなかった多くのことが気付かれ、前に問題とならなかつたことが問題として提示された。従って私は今もなおグリーンを正当に把握したと言う確信を持たない。のみならず本書の叙述は私独自の考案に依ることが多い。本書のうち私自身が余りに現われ過ぎているかも知れない。私はグリーン自身の思想を可能の限り彼れの言に語らしめた積りではあるが、しかもどれだけがグリーンでどれだけが私であるかを不明にした嫌いがいいではない。本書を公にするに当って、グリーンを誤たざらんことをひたすらに望むのみである」。

「トーマス・ヒル・グリーン」の思想体系」は15章から成る大著であり、グリーンについての研究書としてはこれが最初である。昭和13年には本書は上下二巻を一巻にまとめて日本評論社から再版された。本書は783頁に及ぶ大著であり、その構成は以下のように15章から成っている。

- 第一章 緒 論
- 第二章 千八百七,八十年代の英国(上)
- 第三章 千八百七,八十年代の英国(下)
- 第四章 英国理想主義運動
- 第五章 グリーンの生涯
- 第六章 グリーンの思想体系と学風
- 第七章 グリーンの認識論
- 第八章 グリーンの欲望論
- 第九章 グリーンの観たる「自由」の概念
- 第十章 グリーンの道徳哲学
- 第十一章 グリーンの宗教論
- 第十二章 グリーンの社会哲学
- 第十三章 グリーンの社会思想
- 第十四章 グリーン以後の思想界
- 第十五章 グリーンの残したる課題

これらの章から推察されるように本書はグリーン倫理学だけでなく他の諸分野についてのグリーン思想をも含めたものである。河合栄治郎は本書においてグリーン思想を体系的に紹介したが、「序文」にいえる如く「どれだけがグリーンでどれだけが私であるか」をはっきりさせていないようにも見える。河合栄治郎は経済学者、社会思想家であったが、倫理学、とくに理想主義の倫理学に強い関心をもった。かれの中心思想はグリーン思想を学ぶことによってほぼ形成されたようである。日本の知識階級は本書によってグリーンを一段と深く知るようになった。河合栄治郎はグリーンを大規模に且つ体系的にとらえた点においてわれわれはグリーンを広い背景から理解する助けを与えられたといえる。ただかれがグリーンを深く徹底的に究明したかどうかは問題であろう。

河合栄治郎の他の著作、すなわち「社会思想家評伝」はベンサム、J.S. ミル、グリーン、F. ラッサール、の4人の思想をその時代、生立、その影響との関係において適格にのべたものである。本書の構想は「序」にもいっているようにジョン・マッカーンの「六人の急進的思想家」²⁶⁾によってヒントを与えられたようである。本書はグリーンを全体にわたって理解するには最もよい入門書である。本書の最後には「グリーンの文献」として48の著書が列挙されている。著者がこのような形式の書物を書いたのは先人の思想と課題とを知るためには人そのものをよく知る必要があったからである。河合栄治郎が伝記に関心をもつのもこのためである。「社会学徒の中には、単に思想にのみ興味を持つものと、その思想を生んだ人そのものに興味を持つものがある。私の如きは後者の部類に属する。私が本書に於て単に社会思想を語らずして、社会思想家を語ったのは、この故である。人に関心を持たない人の多くは、自己の課題を始めより特定して、その課題に対する解答を諸々の人より探らんとする。然しいかなる課題を持つべきかを最先の課題とするものは、人に関心を持たざるをえない。蓋し先人の抱いた課題を探ることは、自己が何を課題とすべきかに貴重なる示唆を与えるからである」²⁷⁾。これからわかるように河合栄治郎は自己の課題を発見しようとして先人の歩みを追思考したのである。

3) 友枝高彦・近藤兵庫共訳「グリーンとその倫理学」、倍風館、昭和7年。

本書の第一部はグリーンの *Prolegomena to Ethics* の全訳であり、第二部はネットルシップの *Memoir of Thomas Hill Green* の全訳である。すでに西晋一郎の「グリーン氏倫理学」が出版されているにもかかわらず、本訳書が出版されたのはそれなりの理由があったからである。西晋一郎は実に丹念にして且つ原書に忠実に訳した。しかし本書はグリーンの本意をとらえてこれを表現することを主眼としているので、文字通りの忠実な訳ではない、したがって部分的には省略されているところもある。これは以下の理由によるのである。「グリーンの本論は彼の主著と称すべきであって、その卓越せる所以は、英国人には稀に見る徹底的に精緻な思索と分析とにあるとは言え、更にそれが彼の崇高な人格の表現であり、優越したその業績の原則であったからである。今予等がこの書を紹介するに当っては、努めて彼の語氣に於てその説を述べ、達意を求めて然もその哲学的分析の実質を少しも減少することなく、出来るだけ容易に彼の倫理学の全貌を彷彿せしめることに意を致したのである。この目的のために本書を訳述するに当っては、先ず始めにその書の逐次訳を試みたる後、暫く原文から離れて改めて純粋な日本語脈を以て再訳し、読者をして邦語の創作に接する感あらしめることに意を致したのである。……………故に論旨の実質を害しない限り、反覆・冗長と思われる箇所はこれを省略したのである。且原書の編章及びその題目は、そのままこれを襲用したが、節は通常382に分れ、無題であったものを削り、これに代えて章を数節に分け、新しい題目を付け加えた。それも理解を容易ならしめると思ったからである」²⁸⁾。

こうした特色ある訳書が現われたのはグリーンの本論が難解であり、反覆が多くそのために直訳となると日本語になりにくく、敢えて文字通り原書に忠実に訳したならば、グリーンの本意と「語氣」とを失う恐れがあったからである。これに似た著作は1934年

W.D. Lamont, *Introduction to Green's Moral Philosophy* として英国において発行された。これより2年先に日本において「グリーンとその倫理学」が公にされたのであるから、独創的著書であるといえよう。本訳書の第一部は468頁に及んでおり、第二部は149頁に及ぶグリーン伝の伝記である。グリーン伝の伝記はすでに西晋一郎が「倫理学書解説」の中で執筆した「グリーン氏の伝記」として紹介された。西晋一郎の訳は原書に忠実な訳ではなくて、「次に叙する所はグリーン氏全集第三巻同氏伝記の条によりて極めて概略を記せるものなり」といわれているように、グリーン伝の略述である。これに反して友枝高彦・近藤兵庫共訳の「グリーンとその倫理学」の第二部「トーマス・ヒル・グリーン伝」はネットルシップの原書を比較的忠実に訳している。しかし第二部の「八、終末期」という言葉は原書には見られない。それ故本書も必ずしも忠実な訳とはいえないようである。しかし、グリーン伝の生涯と思想とを知る上において本書の第二部は見逃せない。

4) 北岡勲訳「政治義務の原理」, 駿河台出版社, 昭和27年。

本書はグリーン伝の *The Principles of Political Obligation* の全訳である。本書が訳されたのは日本においては北岡氏によって始めてであろう。本書は *Prolegomena to Ethics* とは切り離すことのできない著作であって、グリーン伝の倫理学を理解するためには不可欠である。「序」において原田鋼教授は以下のようにいっている。「グリーン伝の思想が理想主義とよばれているように、基本的にイギリス経験論の本質を発展的に修正しながら、ギリシヤ古典哲学、ドイツ観念論の精髓を吸収して、独自の政治哲学が成立している。従ってここでは、政治哲学上のアポリアの一つである個人の存在と国家の存立との必然的関係を如何にして認証するか、という問題がとりあげられている。グリーン自身は個人の存在をきずつけることなしに、時代の要求である国家機能の強化を合理化するために『公共善』の理念をとりあげている」。これはグリーン伝の「政治義務の原理」において議論されている根本問題を要約したものであって、とくに「公共善」の概念はグリーン伝の思想の中心をなすものである。

5) 北岡勲著「政治哲学の課題」——トーマス・ヒル・グリーン伝の研究——, 一洋社, 昭和24年。

本書はグリーン伝の「政治義務の原理」にそって政治哲学の問題をとりあげたものである。本書は177頁の小著ではあるが、グリーン伝の政治哲学の入門書であるといえることができる。

以上は主として倫理学の見地から昭和におけるグリーン伝研究の著書とその特色とを示したものである。²⁹⁾ これらの外にグリーン伝を部分的に扱った文献として有益なものはつぎの著書である。

- 1) 哲学の諸学派研究(下), 近代社, 昭和2年。
- 2) 荻原拓著「倫理学綱要」, 宝文館, 昭和3年。
- 3) 北岡勲著「イギリス政治哲学の生成と展開」, 柏林書房, 昭和30年。
- 4) 倫理学名著百選(現代道徳講座7), 河出書房, 昭和30年。

以上の考察からわれわれは一応つぎのようにいってよいのではなかろうか。明治時代は主としてグリーン伝の著作をその翻訳によって紹介した時代であったとするならば、大正時代はグリーン

の倫理学の大要を簡単に紹介しそれを論評した時代であったといつてよいであろうし、昭和時代は明治・大正時代に比べてグリーンを本格的に研究し始めた時代であったといえよう。グリーンが受け入れられた理由はそれぞれの時代の課題と研究者の問題意識とによって多少相違している。この点を明らかにするために次節においてやや詳しく考察してみよう。

5. グリーン受容の諸原因

日本においてグリーンが今日まで注目され、研究されてきたのは一体いかなる理由によるのであろうか。この点を明確に理解するためには明治初期から今日まで西洋哲学がどのように移植されてきたか、その間主として英仏の哲学思想からドイツ哲学思想へと関心に変化していったのは何故であるか等の諸問題が解決されなければならない。日本におけるグリーン研究史もこうした西洋哲学思想全体の移植の流れの中において跡づけられなければならないが、ここでは一応グリーンだけを中心にして考察し、かれがいかなる角度と背景とから受け入れられたかを明らかにしてみたい。さて第一に考えられることはグリーンが自我実現説が日本の国民道徳と調和し易かったことである。この点について吉田熊次はつぎのようにいっている。「自我実現説は極めて穩健なる倫理学説である。しかしてこの説は我が国民道徳とはどう言う関係を持っているかと言えば、自我と社会とを調和して自我の実現は即ち一般公共の善と考えるのであるから、我が国民道徳と極めて調和し易い説である。我が国の国民道徳は個人本位ではなくして団体本位である。絶対平等主義ではなくして差別関係主義である。自我の実現は自我の実現にして同時に一般社会の公共の善であるから、この点に於て我が国民道徳の思想と接近している」。³⁰⁾

スペンサーの進化論的倫理学説、ベンサム、J.S. ミル、シジウィックのそれぞれ特色ある倫理学説、グリーン等の理想主義の倫理学説が関心をもって移植されていた明治時代においてグリーンが倫理学説は比較的「穩健なる倫理学説」として歓迎された。日清戦争、日露戦争の大勝利によって日本はますます「国民道徳」の高揚を強調し、これを教育の中心においた事情を考えると、これと調和し易い西洋倫理学説が受け入れられたのは自然の成行であったといえよう。しかしグリーンが自我実現説は日本の国民道徳と最初から完全に一致したわけではなかった。それは日本と英国とは国民の道徳観、国民的気質や考え方、宗教等の点においてそれぞれ相違しているからである。したがって日本人の自我の実現と英国人の自我の実現とは内容の上から見ると多少違っているところがあると考えられる。「要するに自我の実現と言うことは大体に於て我が国民道徳と一致する傾向を持っているけれども自我の内容如何によっては必ずしもそれと一致するものではない」。³¹⁾ 国民道徳は日本人の生活の基本を示したものであって、忠孝を支柱とした道徳体系である。学校教育——とくに修身教育——においては忠孝を中心にした国民道徳の教育が次第に重視されていった。以上のような背景によるためか、文検修身科の試験問題を見ると、グリーンが倫理学説が最も多く出題されている。今その問題の主要なものおよび出題回数をあげれば以下ようになる。³²⁾

アリストテレスの中庸…………… 4 回

カントの倫理説…………… 4 回

ヘーゲルの倫理説……………	3 回
ベンサム の倫理説……………	4 回
功利説批判……………	3 回
グリーン の倫理説……………	6 回

第二にいえることはグリーン の自我実現説が 儒教の教説に 近いものとして みられたことである。たとえばグリーン の真の自我は王陽明の良知であるとみる人もいる。³³⁾ 王陽明においては良知を得る方法がのべられているが、グリーンにおいては自我を実現する方法が十分展開されていない。また孔子の「天徳を予に生ず」はグリーン の自我実現説に近いともみられ、³⁴⁾ 「大学」において説かれている「修身」もグリーン の自我実現論に近いともみられている。³⁵⁾ これらの見方はグリーン の自我実現説が儒教に説かれている自己修養と結びつきやすいと考える一つの見方であろう。

第三の原因は昭和初期における思想的混乱を克服するためにグリーン の思想が知識階級の間において注目されたことである。それは自由放任主義と社会改良主義、忠君愛国主義と立身出世主義、国家主義と個人主義、唯物論と唯心論との矛盾・対立が人々の意識の中にあったことから起った。これらの思想は各人において少しも統一されることなく、いわば「思想的無政府状態」が見られた。これを秩序ある統一された思想に形成するためにはどのような方法にもとづいた研究が最も望ましいのであろうか。この問題意識にもとづいてグリーン に注目したのが河合栄治郎である。³⁶⁾ かれによれば諸思想は根本的にみれば唯二つの思想、すなわち理想主義と経験主義とに帰着するという。とすればこれらのうちどちらが選ばれるべきであろうか。河合栄治郎によれば「私はそれが理想主義者であることを指摘したい。何故なれば理想主義を信ずるものは、その人の道徳哲学の形態が何であろうとも、人としての成長が重大な関心であることは確かである。彼にとって哲学することは、知識としてでなしに、彼自身の止むことをえざる内心の要求である。それなくして生活し能わざる必然の条件である」。³⁷⁾ こうした目的と要求とに最も適した理想主義者としてグリーン が選ばれた。それはグリーン の思想体系が道徳哲学と社会哲学とを根幹としていたからである。グリーン の道徳哲学には「人間としての成長が思想の行間に躍動」しているとみられた。河合栄治郎はグリーン の思想を研究することによって「人格の成長」を学びとり、これを社会改革の原理とした。

第四の原因として考えられることはマルクシズムに対決するために、あるいは思想を公平に理解するための一見地を得るためにグリーン が注目されたことである。昭和7年に発行された「グリーンとその倫理学」(友枝高彦・近藤兵庫共訳)の「序」にはマルクシズムと対決し、思想の一面性を克服しようとして本書が出版されたように見える意図がうかがえる。「近時マルクス主義の運動盛んとなり、遂に思想国難の問題を惹起するに至ったのであって、思想界は固より一般社会に及ぼす悪影響は、往時の功利主義などと日を同じうして語ることは出来ない程である。今や吾々は、グリーン が功利主義に対してなしたところをマルクス主義に対して、更により以上の力を以てなさねばならぬ時である。固よりグリーン の学説その儘の復活によってその目的を達し

ようとは考えないとしても、なおここにグリーンの学説を再吟味して、現代の思潮を検討し、総合の第三見地を樹立することは、望ましいことであろう。されば、グリーン倫理学序論を熟読精考することは、世の風教に関心をもつ人々にとって必須であると謂わなければならない。³⁸⁾

グリーンは英国経験論や功利主義を批判しアリストテレス、カントの倫理学の長所・短所を指摘し、さらにキリスト教をも学びとして自己の倫理学を形成していった。他方ではかれは第十九世紀の英国の政治的社会的問題や教育上の問題に関心をもってこれらを解決しようと活動した。このようにみればグリーン思想は昭和初期の日本における諸問題を解決する一助になったかもしれないであろう。

以上われわれは日本においてグリーンが受容されるに至った諸原因を考察したのであるが、この点についての詳細な吟味・考察は明治以後の日本において西洋哲学全般がどのように移植されてきたか、またこうした全体の流れの中において英国の哲学がどのように研究されてきたかを理解することによってはじめてより完全になるであろう。本稿ではこうした全般的な考察をすることができなかったため、他日この方面を研究することによって日本におけるグリーン研究史を補いたい。

注

- 1) 哲学講座第二巻，誠文堂，昭和6年，71頁。
- 2) 竹内良知「西田幾多郎」，東大出版会，1966，108頁。
- 3) 古川哲史編「倫理学」，角川書店，1953，210頁。
- 4) 丁西倫理会講演集(第九)，大日本図書株式会社，明治35年，106～7頁。
- 5) 倫理学書解説(増補改訂)，育成会，明治38年，382頁。
- 6) 同書， 384～5頁。
- 7) 同書， 386頁。
- 8) 同書， 385頁。
- 9) 竹内良知「西田幾多郎」，106～113頁参照。
- 10) 同書， 108頁。
- 11) 西田幾多郎「善の研究」，岩波文庫，167頁。
- 12) 同書， 155頁。
- 13) 同書， 170頁。
- 14) 同書， 179頁。
- 15) 丁西倫理会講演集(第九)，106頁。
- 16) 「倫理学書解説」の初版を私は現在のところ見ていないので、付加された3人の学説が15人の学説の中で誰のそれであるかを指摘することができない。
- 17) 東京文理科大学哲学会「哲学論叢」，第10輯，125頁。
- 18) たとえば，高山樗牛もグリーン思想から影響を受けたといわれている。(G. K. ビョヴェザーナ 宮川透・田崎哲郎訳「近代日本の哲学と思想」，紀伊国屋書店，1965，63頁)
- 19) レギナルド・ロージャース，藤井健治郎・藤本慶祐共訳「簡明倫理学史」，早稲田大学出版部，大正3年，417～18頁。
- 20) 紀平正美「自我論」，大同館書店，大正5年，334頁。
- 21) 丁西倫理会「倫理講演集」(第百九十四輯)，大日本図書株式会社，大正7年，134～35頁。
- 22) 渡辺竜聖「批評的倫理学」，南光社，大正10年，122頁。

- 23) 同書, 135頁.
- 24) 大島正徳「近世英国哲学史」, 三共出版社, 大正15年, 344頁.
- 25) 同書, 391頁.
- 26) 本書はベンサム, J. S. ミル, コブデン, カーライル, マッチニー, グリーンの六人の思想を要約したものである.
- 27) 河合栄治郎「社会思想家評伝」(河合栄治郎選集), 日本評論社, 序3頁.
- 28) 友枝高彦・近藤兵庫共訳「グリーンとその倫理学」, 倍風館, 昭和7年, 序.
- 29) これらの外に拙著「グリーンの倫理学」(明玄書房刊行)がある. 本書は日本におけるグリーン研究の中では最も新しいものである.
- 30) 吉田熊次「教育的倫理学」, 弘道館(明治43年), 昭和9年第11版, 119頁.
- 31) 同書, 123頁.
- 32) 葉上照澄「倫理学概説」, 同文館(昭和9年), 昭和21年第14版, 44頁, 80頁, 90頁, 149頁, 222頁.
- 33) 竹内良知「西田幾多郎」, 238頁.
- 34) 大島正徳「新倫理学概論」, 至文堂, 昭和23年, 199頁.
- 35) 同書, 201頁.
- 36) 河合栄治郎「トーマス・ヒル・グリーン思想体系」, 日本評論社, 昭和13年, 第一章緒論を参照.
- 37) 同書, 20頁.
- 38) 友枝高彦・近藤兵庫共訳「グリーンとその倫理学」, 序参照.